



中国での菊池寛『結婚二重奏』の受容について：  
小説の映画化を中心に

メタデータ	言語: ja 出版者: 大阪公立大学中国学会 公開日: 2024-04-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 張, 新民 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.24729/0002000543">https://doi.org/10.24729/0002000543</a>

## 中国での菊池寛『結婚二重奏』の受容について —小説の映画化を中心に—

張 新 民

### 【論文要旨】

菊池寛の長篇小说《結婚二重奏》虽不是其作品中最先改编成中国电影，但却是唯一一部两次搬上中国银幕的菊池寛作品。电影《红楼春深》改编于抗日情绪高涨的1934年，电影《结婚交响曲》则改编于沦陷时期的1944年。为此在改编动机和内容表现上，二者都或多或少地带有一定的时代政治影响的印记。在故事内容的改编上，《红楼春深》可谓大刀阔斧，对主人公的爱情命运和故事结尾进行了改写，使影片由原著的爱情悲剧成为一部爱情大团圆的喜剧。《结婚交响曲》的故事改编则相对保守一些，在原著的基本故事框架下，侧重于故事细节表现和喜剧性加工上，使影片成为一部引人发笑的悲喜剧。《结婚二重奏》不仅改编成电影，还由电影再度改写成中篇电影小说《红楼春深》，实现了从小说到电影再到小说的跨媒体传播。以电影为中介，电影小说《红楼春深》的内容与原著小说发生了较大改变，成为中国本土化的翻案小说。在《结婚二重奏》跨境跨媒体的传播过程中，浩然翻译的《结婚二重奏》发挥了很大的影响作用，具有不可忽视的重要地位。

### 0. はじめに

菊池寛（1888-1948）は1920年代から当時の現代日本小説を代表する作家であり、現代日本文壇の重鎮として、その作品が次々と中国にも

紹介され、民国時期の中国文学、演劇、映画製作に大きな影響を与えた日本人作家の一人である。

1920年代後半以降、『第二の接吻』をはじめ『結婚二重奏』、『新珠』など、菊池寛の長篇小説が次々に翻訳された。それだけでなく、『第二の接吻』、『結婚二重奏』、『新珠』は映画化もされた。本稿で取り扱う『結婚二重奏』は『紅樓春深』（天一影片公司、1934）、『結婚交響曲』（中華電影聯合股份有限公司、1944）として二度にわたって映画化された。

また、映画『紅樓春深』を基に創作した同名映画小説『紅樓春深』（開華書局、1934）も出版された。中国に越境した菊池寛の長篇小説は同じメディア間だけでなく、メディアミックスされ、生産、伝播が行なわれた。しかしながら、これまで中国における菊池寛の受容に関する研究は少なく、それらの作品は誰が、いつ、どのように翻訳したか、どの作品をどのように映画化したかなど、未解明の部分が多く残されている。

中国での菊池寛『結婚二重奏』の受容に関して、拙稿「中国での菊池寛『結婚二重奏』の受容について——小説の翻訳を中心に」では、『結婚二重奏』の翻訳出版状況を考察し、1928年雑誌『再造』に連載された慎譯意訳『結婚二重奏』（以下、「再造版」と称す）、1933年9月上海長城書局より出版された浩然訳『結婚二重奏』（以下、「浩然訳版」と称す）、1933年12月濟南渤海叢書社より出版された張品訳『結婚二重奏』（以下、「張品訳版」と称す）、1981年福建人民出版社より出版された馮度訳『結婚二重奏』、四度にわたって翻訳されたことを明らかにした。

本稿では、それを踏まえて、中国での菊池寛『結婚二重奏』の映画化を中心に考察する。

## 1. 映画『紅樓春深』

1927年から1933年にかけて、菊池寛の長篇小説『第二の接吻』（鷗鷺

中国での菊池寛『結婚二重奏』の受容について—小説の映画化を中心に—

子訳『再和我接個吻』、『新珠』(周伯棣訳『新珠』)、そして『結婚二重奏』が次々に翻訳出版された。<sup>1)</sup>

そして1934年になると、菊池寛の長篇小説を映画化した『三姊妹』、<sup>2)</sup>『紅樓春深』、『百花洲』<sup>3)</sup>が製作された。同一作家の三つの作品を一年以内に映画化するのには、中国の映画史上、非常に珍しい出来事といえる。

映画『紅樓春深』は曹雪松が脚本、高梨痕が監督、邵醉翁が監作、陳玉梅が主演、天一影片公司(以下「天一」を称す)が製作、『結婚二重奏』を映画化したサウンド版トーキー映画<sup>4)</sup>である。『紅樓春深』の英語タイトルはtwo couplesで、1934年10月5日、上海のカー登(カールトン)大戲院で初上映された。

「天一」は、1925年6月に上海で邵氏兄弟(邵醉翁、邵邨人、邵仁枚、邵逸夫)によって設立され、映画の製作と配給を専門とする映画会社である。長兄邵醉翁(1896-1979)が社長(総経理)兼監督を務め、当時、「天一」は明星影片股份有限公司(1922年設立、以下「明星」と称す)、聯華影業公司(1930年設立、以下「聯華」と称す)とともに上海三大映画会社と称されていた。<sup>5)</sup>

---

1) 拙稿「中国での菊池寛『結婚二重奏』の受容について—小説の翻訳を中心に」『中国学志』家人号・第38号、2023年3月、31～62頁。

2) 李萍倩が脚色・監督、明星影片股份有限公司が製作した『三姊妹』は『新珠』を改作、1934年6月16日、上海の新光大戲院で初公開されたサイレント映画である(『申報』1934年6月16日)。

3) 于定勳が脚色、文逸民が監督、天一影片公司が製作した『百花洲』は『第二の接吻』を改作、1934年12月15日、上海のカー登大戲院で初公開されたサウンド版トーキー映画である(『申報』1934年12月15日)。

4) サウンド版トーキー映画は、音楽と音響だけで、会話の入っていない映画である。

5) 「天一」は1937年春、上海での映画製作活動を終了、全ての資金と機材を香港に移し、南洋影片公司を設立した。1925年から1937年まで、上海で約百本の物語映画(そのうちトーキー映画は三五本)、およそ二〇本の長短編ドキュメンタリーを製作した(『中国電影大辞典』上海辞書出版社、1995年、949頁、参照)。

一部の『紅樓春深』新聞広告（【図1】）には、監督は邵醉翁と高梨痕二人の名前が書かれているが、「カール登」の映画説明書（【図2】）には、「監製」（監作）は邵醉翁で、監督は高梨痕と記されている。



【図1】初日上映広告

（『申報』1934年10月5日）



【図2】映画説明書

中国教育電影協會が1936年に出版した『两年来国産影片本事（本事：シナリオのあらすじ）彙刊』では、「紅樓春深本事」の監督は高梨痕の名前だけであった。<sup>6)</sup>『两年来国産影片本事彙刊』に収録の映画「本事」は、各映画会社からの提供であり、『紅樓春深』は高梨痕が単独で監督した作品の可能性がある。

高梨痕（1890-1982）は1925年、「天一」に入社し、同社の最初の映画『立地成佛』（1925）に主演した。1926年、「明星」に移り、映画『馮大少爺』（1925）、『掛名の夫妻』（1927）などに出演し、『姊姊的悲劇』（1933）、『壓迫』（1933）などを監督した。1934年に再び「天一」に戻っ

6) 「紅樓春深本事」『两年来国産影片本事彙刊』中国教育電影協會、1936年4月、114頁。

中国での菊池寛『結婚二重奏』の受容について—小説の映画化を中心に—

た。『紅樓春深』は、高梨痕が「天一」復帰後、最初の監督作品である。

7)

『紅樓春深』の脚本について、当時の新聞広告では告知していなかったが、「カール登」の映画説明書や『两年来国産影片本事彙刊』に収録している「紅樓春深本事」では、曹雪松の名前を挙げている。

曹雪松（1907-1984）は江蘇省宜興出身、本名は曹錫松で、1923年、蘇州省立第二農業学校在学中に『学生文芸叢刊』（大東書局）で詩や劇本を発表し始めた。1924年、上海大学の中国語科に入学、1925年、文友社を結成した。上海大学の学生演劇団に参加し、演劇活動に従事した。<sup>8)</sup> 1926年、上海大学の友人丁丁と共に、恋愛詩集『恋歌』（上海泰東書局）を編集・出版。1927年、ドイツの小説家ゲーテ（Johann Wolfgang von Goethe, 1749-1832）の同名小説を改作した戯曲『若きウェルテルの悩み』（上海泰東書局）、詩集『愛的花園』（上海群衆図書公司）を出版した。1928年、長編小説『溪邊黄昏』（上海群衆図書公司）、アメリカ映画『党人魂』（The Volga Boatman, 1926）に基づいて創作された映画小説『火榴』を出版した。1929年4月、孤星影片公司<sup>9)</sup>に入り、ドイツの劇作家シラー（Johann Christoph Friedrich von Schiller, 1759-1805）の戯曲『群盜』（Die Räuber, 1781）を改作した同名映画『群盜』（監督董天鐸）の脚色を担当し、<sup>10)</sup> 同年8月には短編小説集『心的慘泣』（上海泰東書局）を、同年9月には散文『雪茵的情書』（上海現代書局）を出版

---

7) 1934年、再び「天一」に戻った高梨痕は、『紅樓春深』のほか、『緋珠』（1934）、『堅苦的奮斗』（1935）、『花花草草』（1936）など、十数本の物語映画を監督した。1937年、香港の「天一」・南洋影片公司に移り、日中戦争期には香港で映画製作や演劇活動に従事。1952年、香港から上海に戻り、のちに上海文史館の館員になった。1982年9月、上海で病死（『中国電影大辞典』上海辞書出版社、1995年、279頁、参照）。

8) 「上大劇団成立会」、「上大発起文友社」『申報』1925年10月11日。

9) 孤星影片公司是1928年、上海横浜路で陸福曜によって設立され、『彼女の仇敵』、『新玉堂春』、『騎侠』、『二孤女』、『離恨天』など、一〇本の物語映画を製作したが、1932年、業務を停止した。

10) 「劇場消息」『申報』1929年7月18日。

した。1930年、長篇小説『死者的情書』（上海群衆図書公司）、散文集『紅橋集』（上海南星書店）を出版、1931年、長篇小説『詩人的情書』（上海現代書局）を出版した。1932年、強華影片公司<sup>11)</sup>に入り、映画『鐘声響了』（監督文逸民）を脚本した。1933年10月、「天一」に入り、<sup>12)</sup>『熱血青年』（監督湯傑、1934）、『舞宮春夢』（監督文逸民、1934）、『歡喜冤家』（監督裘芑香、1934）、そして『紅樓春深』など、映画の脚本を担当した。<sup>13)</sup> 曹雪松の創作活動は詩、小説、散文、演劇、映画など、多岐にわたっているが、その創作傾向としては、愛情、特に悲恋物語に重きを置いていた。

曹雪松は日本留学経験も、日本語を学んだ学習歴もなかった。『紅樓春深』は中国語翻訳版の『結婚二重奏』を基に改編された作品であろう。当時、「再造版」、「浩然訳版」、「張品訳版」があるが、連載翻訳の「再造版」は未完成であり、「張品訳版」は上海での販売をしていなかった。<sup>14)</sup> 『紅樓春深』改編の下敷きになった翻訳本は、上海を中心として販売されていた「浩然訳版」の可能性が極めて高いであろう。

---

11) 強華影片公司是1932年、文逸民、范雪朋、姚士泉によって上海で設立され、『觉悟』、『我們的生路』、『鐘声響了』、『淪落』（原題「鉄鏈」）、四本の物語映画を製作したが、1934年春に活動を停止した。

12) 犀「天一碎錦」『申報』1933年10月29日。

13) 曹雪松は映画『王先生』（監督邵醉翁、1934）をはじめ、葉浅予の人気連載漫画『王先生』を基にしたシリーズ喜劇映画『王先生の秘密』（監督湯傑、1935）、『王先生過年』（監督湯傑、1935）、『王先生到農村』（監督湯傑、1935）、『王先生奇侠传』（監督左明、1936）、『王先生生財有道』（監督左明、1937）の「小陳」役を演じ、好評を博した。日中戦争期、貴州国民党軍事管理区政治部宣伝課長、貴州ラジオ放送局課長、子供劇团团長、重慶国民党軍事委員会政治部電影放映課長、中国電影製片廠放映課長などを歴任し、抗日宣伝活動に従事した。1947年以降、香港に渡り、『三女性』（監督岳楓、大中華、1947）や『滿城風雨』（監督文逸民、大中華、1948）などの映画の脚本を手がけた。1950年、上海に戻り、友人の紹介で虹口中学に入り、歴史教師として勤めた。1984年、上海で病没。

14) 『結婚二重奏』の翻訳状況について、拙稿「中国での菊池寛『結婚二重奏』の受容について——小説の翻訳を中心に」（『中国学志』家人号・第38号、2023年3月、31～62頁）にて、詳しく論じている。

中国での菊池寛『結婚二重奏』の受容について—小説の映画化を中心に—

映画『紅樓春深』については、「浩然訳版」出版の長城書局は、『紅樓春深』の公開上映に合わせて掲載した新聞記事において、次のように述べている。

カール登大戲院で今日から上映される『紅樓春深』は、天一映画会社が製作、陳玉梅が主演する作品である。『紅樓春深』の脚本は、日本の文芸界の権威である菊池寛の作品『結婚二重奏』を改編したものである。(中略)長城書局は有名な作家である浩然君に翻訳を依頼し、『結婚二重奏』の書名で出版している。『紅樓春深』をご覧になりたい場合は、まず『紅樓春深』の原作である『結婚二重奏』が必読であり、文芸に興味のある方には特におすすめである。(「紅樓春深の原劇本」『申報』1934年10月6日)

しかし、映画『紅樓春深』の作品のみならず、さらに上映新聞広告、「カール登」の映画説明書など、その映画宣伝においても、原作をアピールしなかった。つまり、映画製作側の「天一」は、菊池寛の原作であることをセールスポイントにしない宣伝措置を取った。その背景には、1931年の「満洲事変」、特に1932年の上海「一・二八事変」以後、中国社会における反日感情の高まりと関連しているのであろう。

映画『紅樓春深』は、原作の二組のカップルをめぐる三角関係の恋愛、復讐するための結婚、不仲な夫婦生活という物語の根幹部分だけを残して、登場人物の名前や地名を中国のものに置き換え、主人公たちの最後の恋の行方まで書き直した。

現代文芸編訳社秘書周碧蓮は、社長室で自作した戯曲『臥薪嘗胆』の舞台公演のために上海にやってきた新鋭文学者郁青峯と知り合った。青峯は四年前に亡くなった元婚約者梅芳とよく似ている碧蓮に対して好感を抱き、碧蓮は青峯の亡くなった婚約者への深い愛で心を動かし、二人の親密さは増す。しかし、『臥薪嘗胆』の主演女優羅蘭も青峯を好きになった。会社員張鶴年は碧蓮に恋焦がれており、彼女にプ



ロポーズを断られても、あきらめず彼女を追いかけている。公演終了後、青峯は無錫に戻り、碧蓮に遊びに来るように誘う。碧蓮は無錫に来て、二人は愛情を深め、楽しい時間を過ごしたが、青峯が求めた愛のキスを拒んで、上海に帰る。同じ日に、碧蓮と相前後して、羅蘭も無錫にやってきて、青峯のところを訪れる。青峯は羅蘭のことが好きでないが、彼女の誘惑に負けて男女の仲になり、一夜を過ごした。翌日、再び無錫にやってきた碧蓮がそれを知り、悲しみと憤りで胸がいっぱいになる。それから二ヶ月後、青峯は羅蘭の妊娠報告を受け、彼女との結婚を決心する。碧蓮は青峯と羅蘭の結婚を知り、意地になって鶴年との結婚を決める。新婚旅行先の南京で、鶴年は許可なく碧蓮にキスをしたため、夫婦喧嘩になり、気まずい思いをして新婚生活が始まる。結婚後、青峯と羅蘭は上海で新居を構えて暮らし始めたが、羅蘭の妊娠報告は結婚を迫るための真っ赤な嘘であることが発覚して、夫婦関係が悪化する。毎日のように夜遅くまでダンスホールに通い、愛人もできた羅蘭に我慢できず、青峯はついに新居を出て、無錫に戻る。結婚後、鶴年はつれない碧蓮の歓心を得ようと二人の無錫旅行を企画したが、宿泊先のホテルに青峯も宿泊していた。青峯と碧蓮は再会し、互いに苦衷を吐露し、これまでのしこりを水に流す。碧蓮を探しに来た鶴年は、抱き合っている二人を目撃して、怒りを覚えたが、愛は無理強いするものではないと悟り、碧蓮に分かれの手紙を残して、ホテルをひとりで去る。<sup>15)</sup>

現代文芸編訳社秘書の周碧蓮、新鋭小説家・劇作家で、元婚約者梅芳に死別した郁青峯、劇団女優の羅蘭、会社員の張鶴年、登場人物の設定は、原作『結婚二重奏』の吉村事務所英語翻訳の山路扶美子、新進作家で、元婚約者綾子に死別した立花芳雄、劇団女優の木村弥生、会社員の正木省三とほぼ一致している。

<sup>15)</sup>「紅樓春深説明」(カ爾登影戲院の映画説明書)、「電影小説紅樓春深(一)」(『申報』1934年9月20日)、「電影小説紅樓春深(二)」(『申報』1934年9月21日)、「紅樓春深本事」(『两年来國產影片本事彙刊』、1936年、21～22頁) 参照。

物語の主な舞台は『結婚二重奏』の東京を上海に置き換え、扶美子と正木の新婚旅行先の京都も碧蓮と鶴年の南京にした。立花の執筆活動の滞在先は逗子の逗子ホテルと伊東の香風館であるが、『紅樓春深』は無錫の「湖濱旅館」だけに限定した。太湖畔の鼇頭渚にある「湖濱旅館」は、海辺にある逗子ホテルと川沿いにある香風館と環境的にはよく似ている。『紅樓春深』のロケ撮影は太湖の鼇頭渚で行われて、奥ゆかしく美しい風景は人の旅行気分をかき立てる。<sup>16)</sup>

『結婚二重奏』では扶美子と正木は結婚後の夫婦旅行で伊東を訪ね、立花がよく利用する香風館に宿泊し、女中は扶美子を案内して、立花のいた離れまで見せてくれたが、立花が香風館を訪ねた時、扶美子と正木は既に出立して、扶美子との再会は出来なかった。立花と扶美子の愛情物語は「梢に復らず」という切ない結末になった。扶美子と正木の婚姻関係が破綻せず、不本意でありながら維持している。しかし、『紅樓春深』では羅蘭との婚姻関係が破綻した青峯と青峯への未練を断ち切ることができず、不本意な夫婦生活に苦しむ碧蓮は再会し、鶴年は二人の愛を成就させるため、しづしづ碧蓮と夫婦別れをするという運命に書き直し、青峯と碧蓮の愛情物語は元のさやに収まるめでたい結末になった。青峯と羅蘭、そして碧蓮と鶴年の婚姻関係の破綻は、愛情のない結婚は無理やり進めても幸せにはなれず、長続きし得ないという主題を強調した。

『紅樓春深』は日本菊池寛の原作である。その物語の筋書きは原作と大体同じであるが、その結末だけが異なっている。(中略) その結末の改作はとても良かったと思う。なぜなら原作のままでは、味気無いからである。<sup>17)</sup> 『紅樓春深』の楽しいところは郁青峯と周碧蓮が最後には夫婦として結ばれたことであるが、それを成功させた方法は旧套に縛られず、張鶴年が手紙を残して立ち去り、彼女を青峯に譲ったのである。張鶴年は忠実で情に厚く、愛する人に精神上の苦痛を与えた

<sup>16)</sup> 林雪江女士「閒話『紅樓春深』」『新聞報』1934年10月5日。

<sup>17)</sup> 戊「『紅樓春深』我評」『新聞報』1934年10月9日。

くないため、何の躊躇もなく去っていった。彼は品行方正だけでなく、慈しみ深い心も持っている。残念ながら、世の中にはそのような人がいないのである。もしそのような人がいれば、世を挙げて敬い慕うべきである」<sup>18)</sup>と、『紅樓春深』の結末に対して肯定的な観客意見が多数寄せられた。しかし、『紅樓春深』の結末は愛し合っている人は最後には結ばれるという観客の願望を満足させたが、愛のために手を放すという高潔な鶴年を持ち上げすぎていてかえって真実味を失っている。

「なぜ当初陳玉梅（周碧蓮）を執拗に追求した葛福栄（張鶴年）は、最後には甘んじて陳玉梅を余光（郁青峯）に譲ったのだろうか」<sup>19)</sup>と、周碧蓮に対して、前と後ではまるで別人のような態度を取った張鶴年を理解に苦しむという観客意見もあった。

映画『紅樓春深』には『結婚二重奏』と異なるところがもう一点ある。それは郁青峯、周碧蓮、羅蘭三人が知り合ったきっかけとなる郁青峯が演出をつとめる芝居の内容である。

原作『結婚二重奏』では、舞台稽古をする芝居はピランデロの『アンリ四世』<sup>20)</sup>と立花芳雄の『三人の女』という現代物の恋物語であるが、「浩然訳版」では「先生的父親的愛，立花芳雄的三人之女」と訳した。<sup>21)</sup>『アンリ四世』を吉村氏の『父親的愛』（父親の愛）に訳したものの、『三人の女』に関しては『三人之女』の題名も、その芝居の内容も基本的に原作のまま、忠実に翻訳している。しかし、映画『紅樓春深』は、その芝居を中国春秋時代の呉と越の争いを描く歴史歌劇『卧薪嘗胆』に書き換えた。

映画『紅樓春深』に登場した『卧薪嘗胆』は、越王勾踐が呉王夫差

---

18) 胡愍珠「春深豈独在紅樓」『新聞報』1934年10月5日。

19) 黄人「看『紅樓春深』後幾個人人想問的話」『影迷週報』第1卷 第5期、1934年10月24日、84頁。

20) ピランデロの『アンリ四世』は、イタリアの劇作家、小説家であるルイジ・ピランデルロ（Luigi Pirandello, 1867～1936）の戯曲『エンリコ四世』（Enrico IV, 1922年）のことである。

21) 浩然訳『結婚二重奏』長城書局、1933年、29頁。



【図3】 歴史劇『卧薪嘗胆』的一幕

に復讐のための策謀として美女の西施を献上し、策略は見事にはまり、夫差は西施の容色に溺れている間に、呉は越に滅ぼされたという西施の物語であり、呉王夫差と西施が行宮で蓮を採る場面と越王勾践が兵士を訓練す

る場面を通じて表現している。『卧薪嘗胆』を演じるのは、当時上海の人気少女歌舞団「新華社歌舞団」である。のちに上海映画界の大スターになった周璇（1920-1957）がエキストラとして出演した。【図3】のように、呉王夫差と西施が行宮で蓮を採る場面は大掛かりな舞台セットを設置し、多くのエキストラを起用しており、アーチ橋で十数人の頭に大きな蓮の花を載せた水着姿の少女たちが一列に並んで踊り、蓮池の石舫で呉王夫差が腰を下ろして、西施の歌と踊りを楽しんで、一番手前の池辺に座った少女たちが月琴、琵琶、横笛、簫など、音楽を演奏している豪華な舞台演出といえよう。前述の【図1】『紅樓春深』の初日上映広告も【図3】と同じような場면을撮影したスチール写真を使用した。映画の恋愛物語との関連が薄い演劇『卧薪嘗胆』が、映画宣伝のセールスポイントになっている。

前述のように『紅樓春深』は「全部歌唱音楽有聲電影」というサウンド版トーキー映画である。呉王夫差と西施が行宮で蓮を採る場面では、バックミュージックとして『採蓮歌』が流されている。『採蓮歌』の創作担当は、当初は「天一」の「劇務部」編輯高天棲であったが、高天棲が作詞・作曲した『採蓮歌』<sup>22)</sup>は採用されず、改めて1934年6月

22) 高天棲『採蓮歌』の歌詞は以下である。

採蓮採蓮。採蓮採到水亭前。碧波明似鏡。楊柳拂輕烟。採蓮採蓮。大的蓮葉像綠蓋。小的蓮葉像青錢。採蓮採蓮。採蓮莫採葉。蓮葉底下鴛鴦眠。鴛鴦眠。

に大ヒットした映画『漁光曲』（監督蔡楚生、聯華）の主題歌「漁光曲」の作詞安娥と作曲任光に依頼して、『採蓮歌』を新しく作り直した。歌「漁光曲」が巻き起ったセンセーションは「後に映画が興行で成功するためには音楽が必要不可欠となる流れを生み出すほどのものであった」。<sup>23)</sup>「最近、各社の新作映画は歌が挿入されていないものがないが、その歌は任光と安娥の共作なしでは魅力がないという傾向がある」。<sup>24)</sup>つまり、『採蓮歌』の創作計画が途中で変更されたのは、安娥と任光の影響を利用して観客を惹きつけようとする意図があるろう。

安娥作詞『採蓮歌』は二つの部分に分かれている。最初の部分では、若い男女の恋愛物語が描かれており、歌の内容は終始蓮の根、蓮の花、蓮の心に絡むもので、これによって深い愛情が表現されているが、二番目の部分では、蓮を収穫して生計を立てる労働者たちの困難な生活が描かれており、対象が恋愛から現実の生活へと移り変わり、作者の労働者に対する同情を表現している。<sup>25)</sup> その歌詞の内容から、特に若

---

採蓮歌唱夕陽天。

採蓮採蓮。採蓮採到畫塘邊。香風拂衣袖。涼露滴船舷。採蓮採蓮。含雲蓮花像少女。盛放蓮花像青年。採蓮採蓮。採蓮莫採子。蓮子心苦惹人憐。惹人憐。採蓮歌唱過前川。

採蓮採蓮。採蓮採蓮。莫採蓮的葉。莫採蓮的子。採蓮要採花色妍。採蓮要採花色鮮。花色妍。花色鮮。若把人顔 and 花比。人顔還比花色妍。（『新聞報』1934年7月31日）

23) 王達平「一年来之中国音楽」『申報本埠增刊』1935年1月6日。

24) 天人「任光安娥之一段情史」『電聲』第3卷第41期、1934年10月26日、807頁。

25) 安娥作詞・任光作曲『採蓮歌』の歌詞は以下である。

（一）採蓮，輕打槳兒慢彎船，湖水深處花兒鮮，採呀，採蓮。採蓮，腕兒猛伸身兒偏，浪花驚波船兒顛。採呀，採蓮，含羞還帶淚，莖斷絲猶連。花兒嬌，嬌嬌如人面，葉兒姍，姍姍如少年。採呀，採蓮。但願我命莫如蓮心苦，只望君心要比蓮莖堅。採呀，採蓮。百姓們種下白玉藕，貴人們採蓮夕陽天，採呀，採蓮。画舫去歌聲遠，白雲如水水含烟。採呀，採蓮。

（二）採蓮，輕打双槳慢彎船，莫損嫩芽水底鮮，採呀，採蓮。採蓮，曉風吹過船兒險，朝雨打來透衣寒。採呀，採蓮。但見花兒艷，誰念人兒難，賣花人，那管風和雨，鮮花兒，趕送妝台前。採呀，採蓮。情願辛辛苦多採花幾朵，只望鮮花能賺養家錢。採呀，採蓮。朝採蓮，三餐難一飽，暮採蓮，衣衫不周全。採呀，採蓮。年年過盡飢寒苦，歲歲搖船五更天。採呀，採蓮。（『新聞報本埠

中国での菊池寛『結婚二重奏』の受容について—小説の映画化を中心に—

い男女の恋愛物語が描かれる部分では、安娥作詞の『採蓮歌』は、高天棲の『採蓮歌』を参考に、その一部の内容を取り入れている。『紅樓春深』は「世界文学の名作『結婚二重奏』からのインスピレーションを得ており、そのストーリーは複雑で感動的である。任光と安娥が作った『採蓮歌』は、作品に彩りを添えている」。<sup>26)</sup>

『紅樓春深』の公開上映に合わせて、百代（パテ）レコード会社が録音製作、主演陳玉梅が歌う『採蓮歌』のレコードを発売し、各ラジオ放送局も『採蓮歌』のレコードを一斉放送した。<sup>27)</sup> 上海では、1934年から1935年にかけて、ラジオは新興の文化メディアとして急速に発展しており、レコードを媒介として歌手や流行歌が市民の日常生活に徐々に溶け込んでいった。28映画の宣伝は新聞広告だけでなく、映画音楽のラジオ放送やレコード販売も重要な宣伝手段となった。『採蓮歌』のレコードは大好評を博し、発売してから二週間で数千枚販売された。<sup>29)</sup>

越王勾踐が兵士を訓練する場面にも北平育英中学校歌詠隊の合唱曲『保国歌』（国を守る歌）が挿入されている。<sup>30)</sup> 『保国歌』は『紅樓春深』のために書き下ろした歌ではなく、北平育英中学校歌詠隊が春休みを利用して、1934年4月1日から19日にかけて、天津、済南、南京、上海、杭州五大都市で行った巡回公演の合唱曲の一つである。同年4月9日から11日まで上海公演の際に、「天一」は歌詠隊一行を招き、その一部公演の様子を撮影した。上海勝利（ビクター）レコード会社は『保国歌』など、数曲の合唱曲を録音した。<sup>31)</sup> 北平育英中学校歌詠隊の公

---

附刊』1934年10月5日)

26) 『『紅樓春深』開映盛況』『申報』1934年10月12日。

27) カ爾登大戲院『紅樓春深』上映広告（『新聞報本埠附刊』1934年10月5日）。

28) 夏滌洲「近代中国音乐史加强日常生活史研究的学术意义」『黄钟』（武汉音乐学院学报）2020年第1期、103頁。

29) 隠仕「銀幕新聞」『申報』1934年10月17日。

30) 明夷『『紅樓春深』的保國歌』『新聞報本埠附刊』1934年10月7日。

31) 「北平育英中学歌詠隊在滬表演」『新聞報』1934年4月11日。

演プログラムは「意気軒昂な歌が多く、それによって民族意識を宣揚し、愛国精神を奮い起こす」。<sup>32)</sup>つまり、『保国歌』は1930年代「抗日救亡」の思想を宣伝する歌である。「中華民國萬萬同胞」、「我輩中華青年」、「中國乃我中國」などの歌詞からもわかるように、『保国歌』の内容は呉と越の争いの歴史背景からかけ離れている。<sup>33)</sup>当時高まっている反日気運に応じるため、映画の内容の合理性を無視して強引に組み込まれたものである。

映画『紅樓春深』の『卧薪嘗胆』について、一部の観客は「特に興味深いところは芝居稽古的一幕である。呉越の物語を借りて国民を激励するのである。呉王は奢侈淫佚、高慢で身の程を知らない。越王は肅々と戦闘の準備をする。だから最後に越は呉を滅ぼした。現在我が国の状況は越の国の立場とよく似ている。全国の国民は醉生夢死の生活を送るのか、それとも懸命に奮闘するのか、これを自問しなければならぬ！」<sup>34)</sup>『紅樓春深』の「幾つかのシーンは大いに得るところがあり、特に越国の兵士がたいまつで『湔雪國恥(国辱をすすぐ)』という大きな文字を作り上げたシーンが素晴らしい」<sup>35)</sup>と、感想を述べている。

また、一部の観客は「『紅樓春深』は疑いの余地なく、前時代的な自由主義の説教であり、幻滅しやすい恋愛至上主義の絵画である。中国は帝国主義の侵略や国内の混乱に直面し、人々が必要としているのは

---

32) 「北平育英中学歌詠団来滬表演」『時事新報』1934年4月7日。

33) 『保国歌』の歌詞は以下である。

雷鳴浪吼，蒼穹破裂。若是大聲向我呼曰，中華民國萬萬同胞，何人欲作保國英豪。我一聞此全能之聲，直如利劍刺我心中。喝醒愚夢，打破迷圖，傾心樂意護此江山。祖國時局危迫，我輩中華青年，豈可漠漠無關。大家快快聯合，同心齊力護江山。齊力護江山，耳聞慷慨歌聲，鼓盪大地天空。眼觀國旗飄飄，能不動於中。中國乃我中國，興亡匹夫有責，分當同心努力，保此錦繡山河。  
(明夷『紅樓春深』的保國歌『新聞報本埠附刊』1934年10月7日)

34) 李祖唐「紅樓春深是指導男女戀愛的南針」『新聞報本埠附刊』1934年10月5日。

35) 章玉卿「紅樓春深」我評」『新聞報本埠附刊』1934年10月9日。

決して神聖な恋愛や雲をつかむような楽園ではない。国家は崩壊し、国民は生活に苦しんでおり、帝国主義の抑圧はもう我慢できない。このような不幸な混乱と苦しい状況の中で、映画製作側（映画製作商）がこのような甘い麻酔を広め、催眠曲を大々的に歌うことは、非常に不適切だけでなく、映画芸術に対しても失礼だ。厳密に言えば、『紅樓春深』はこのような時代に生まれて、時代的な価値がまったくないと言えるだろう」と、酷評した。<sup>36)</sup>『紅樓春深』は当時の社会情勢に合わせて、呉越の物語『卧薪嘗胆』に書き換えてみたものの、映画が描く恋愛ストーリーには、一部の観客には不満もあった。

映画『紅樓春深』は大好評を博し、1934年10月18日まで「カール登」で二週間上映され、「毎日満員となり、三万数千人の観客が一斉に称賛する国産映画」<sup>37)</sup>であった。同年10月21日から11月8日まで、「黄金」、「上海」、「東海」、「明星」、「山西」、「榮金」などの映画館で上映し続けた。

つまり、『紅樓春深』の映画化は、社会の現実に適合し、中国の観客の観劇心理に合致するように一定の努力がなされ、それによって一定の成功を収めたといえよう。

## 2. 映画小説『紅樓春深』

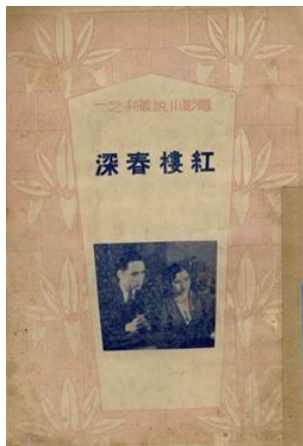
映画『紅樓春深』の「カール登」での正式上映に先立ち、1934年9月9日、「カール登」と北京大戲院両館において、映画、新聞、文芸各界の関係者を招待した『紅樓春深』の試写会が開催された。「新作が二つの劇場で同時に試写されることは、『紅樓春深』が初めての例である」。<sup>38)</sup>同年9月下旬に入ると、映画の公開上映のために一般観客向けの新聞宣伝を展開した。『申報』は9月20日、「紅樓春深 上映日と場所にご注意ください」との上映予告を掲載し始めた。それと同時に、『申報』は9

<sup>36)</sup> 静「關於『紅樓春深』」『福爾摩斯』1934年10月7日。

<sup>37)</sup> 上海大戲院・黄金大戲院『紅樓春深』上映予告（『申報』1934年10月20日）。

<sup>38)</sup> 『紅樓春深』試映盛況『申報』1934年9月11日。





【図4】『電影小説叢刊之一  
红楼春深』開華書局、1934

月20日と21日の2日間にわたり、隴耕の「電影小説红楼春深」も連載した。「電影小説红楼春深」は約1500字、映画興行宣伝のため書かれた映画小説で、観客に映画館で映画鑑賞してもらおうことが狙いである。

1934年10月、開華書局は「電影小説叢刊之一」として、高陵の中篇映画小説『红楼春深』を出版した（【図4】）。

開華書局は上海四馬路（現在の福州路）にあり、高爾松（1900-1986）と高爾柏（1901-1986）兄弟により共同経営された書店で、その前身は平凡書局であった。高氏兄弟は、江蘇青浦（現在の上海）出身で、1923年、上海大学在学中に中国共産党に入党したが、第一次国共合作期間中に国民党にも加入した。1927年4月、蔣介石が行った共産党勢力を排除した「上海クーデター」後、日本に亡命した。1929年夏、高氏兄弟は上海に戻り、平凡書局を設立した。主に社会科学書を出版し、社会主義と唯物論を広めたが、わずか一年で公共租界工部局によって閉鎖された。1930年12月、高氏兄弟は開華書局を設立した。1931年8月、中学生書局も開設した。開華書局では学術書を名目に出版し、一方で中学生書局では政治的色彩が薄い一般書や中学生向けの参考書、辞書などを出版していた。<sup>39)</sup>

「電影小説叢刊」は1934年に発刊した映画小説シリーズで、当初開華書局で出版されたが、のちに中学生書局の出版に変更した。

開華書局の「電影小説叢刊」について、編集者は次のように述べている。

<sup>39)</sup> 王蔚「从煊赫一时到销声匿迹：《怎样读书》与一心书店（下篇）」（『文匯報』2018年12月28日）を参照。

中国での菊池寛『結婚二重奏』の受容について—小説の映画化を中心に—

本叢刊は批評的な視点から、優れた国産映画を選んでいる。ストーリーの主旨に忠実で、流暢で分かりやすい言葉で書かれ、簡潔な小説形式のブックレットは、映画観客が物語を理解するのに役立つだけでなく、一般の小説としても十分に楽しめるものである。(『電影小説叢刊之一 孔夫子』中学生書局、1941年1月、奥付)

現存する史料によれば、開華書局は1934年に「電影小説叢刊」映画小説シリーズを七冊出版し、中学生書局は1941年1月まで開華書局の再版映画小説を含めて一〇冊を出版した。「電影小説叢刊」は、当時の単行本として、長期間にわたり、出版作品数が最多の映画小説シリーズであった。

「電影小説叢刊」の映画小説は短編集と長編2種類ある。短編集は、複数の映画小説が収録されており、数百字のものから、数千字のものもある。例えば、1934年「天一」製作の映画『春宵曲』を題名とした同名映画小説集『電影小説叢刊之一 春宵曲』は『南国之春』(1932、聯華)、『母性之光』(1933、聯華)、『人道』(1932、聯華)、『紅涙影』(1931、明星)、『落霞孤鶩』(1932、明星)、『蘭谷萍踪』(1932、天一)、『生機』(1933、天一)、『我們的生路』(1933、強華)、『頼婚』(又名『失足恨』1932、聯華)、『琵琶春怨』(1933、明星)、『健美之路』(1933、明星)、『歌場春色』(1931、天一)、『除夕』(1933、聯華)、『城市之夜』(1933、聯華)、『如此英雄』(1933、聯華)、『帰来』(1934、聯華)、『青春之火』(1933、天一)、『似水流年』(1934、天一)、『春宵曲』一九作の映画小説が収録されており、その一番長いもの『紅涙影』は三千字以上あるが、最も短いもの『我們的生路』は約八百字であった。<sup>40)</sup> 当時、他の書店も同様の映画小説集を出版していたが、『春宵曲』のように一つの作品で冠名された映画小説集は、非常に珍しいものであった。映画『春宵曲』は1934年10月18日に「カール登」で初公開され、映画小

---

40) 陳明『電影小説叢刊之一 春宵曲』開華書局、1934年11月。

説集『春宵曲』は1934年11月に出版された。この映画小説集が『春宵曲』と冠名されたのは、映画『春宵曲』が最新の公開映画であったことと関連があろう。

「電影小説叢刊」の中篇映画小説『紅樓春深』は、総頁数八一頁、約二万七千字で、「前言」を含めた「送花」、「一見如故」、「愛的開始」、「與愛人相會」、「浪漫女子」、「拒愛」、「青峯允婚」、「蜜月旅行」、「出走」、「重見」一〇章の構成である。

中篇映画小説『紅樓春深』の内容について、作者高陵は次のように述べている。

天一公司の『紅樓春深』は日本文壇の老将菊池寛の小説『結婚二重奏』を改作した作品である。(中略)本書は完全に映画『紅樓春深』のストーリーに基づいたものであるが、同時に『結婚二重奏』の翻訳も参考にしている。しかし、本書は映画の小説版であるため、大部分は映画の物語に合わせなければならない。原作と少し異なる部分がある。特に結末部分では、原作では周碧蓮(山路扶美子)と郁青峰(立花芳雄)には二度目の出会いがなかったが、映画では張鶴年(正木省三)の犠牲によって、二人が再び結ばれることになっている。(高陵「前言」『紅樓春深』開華書局、1934年10月、1頁)

前述のように、『結婚二重奏』の「張品訳版」は上海で販売されておらず、高陵が参考にした翻訳本は長城書局の「浩然訳版」であろう。高陵『紅樓春深』は、花屋に向かう周碧蓮から始まる。

從電車上下來以後，周碧蓮向一家花店走去。

二月尾的太陽，帶着溫柔的撫愛散射下來，像流浪者得了安慰一樣，人們開始感到有些春意了。陽光從人行道上的樹枝中灑到碧蓮的身上，在輕柔的西服上跳着舞，她的烏黑的頭髮微微地震動，

表示出她的勝利的姿勢。在靜寂的街道上，在少數的行人中，唯有她是最充滿了人生的朝氣，氣昂昂地跨着大步。

她是幸福的。去年夏季出了學校的門，在家裏耽擱了三個月模樣，偶然在報上見到一個在小說家姓李的主幹的現代文藝編譯社招考書記的廣告。仗着自己是英文科出身的學生，便去應了考；李社長吩咐她翻譯了美國某作家的一節作品，覺得非常滿意，最後才決定了任用碧蓮。

從此碧蓮得了人生的新興味，對於那輕鬆而有趣味的工作，幹得很起勁。

在幾日之前，她因為看見李社長書房裏供養的花已經枯謝了，今天趁到社辦公的時候，她特為到一家花店裏去買些花帶去。（高陵『紅樓春深』、1～2頁）

「電車から降りて、周碧蓮は花屋に向かって歩いていった」、「陽光が歩道の木の枝から周碧蓮の身体にそそがれ、柔らかいスーツの上で踊っている。彼女の黒い髪は微細に揺れ動き、彼女の勝利のポーズを示している」など、最初の二段落の描写は非常にダイナミックでビジュアル感があり、映画のシーンを文学的に表現している。しかし、その後の周碧蓮の過去に関する描写は、映画では直接的には登場せず、文学作品の内容を充実させるために、原作小説の翻訳を参考にして書き加えた部分である。

她是女子大學畢業的，三四年前又從英國人安德氏專攻英文，對英國文學，頗有心得。她還沒有結婚她父母年事也大了，對於她的婚事，着實但心。去年秋季，老小說家吉村氏曾經登過廣告，說是要找一個長於英文文學的人幫他的忙，她原是英文科出身的，學歷志趣，對此項任務極為適宜，她去會見吉村氏，把自己的志願對她說了，吉村氏着她譯了美國某作家底作品一節，覺得非常滿意，吩咐她擔任了繙譯雜誌小品文字的任務。

「一星期來兩回就可以了」吉村氏這樣對她說。

從此扶美子得了人生的新趣味，覺得頗有興感，她對於那每星期兩次的工作，幹得非常起勁。

幾日前，她因為看見吉村氏書房裏插在花瓶上的花已經枯謝了，她特自跑到附近的花店去買了些花帶去。（浩然訳『結婚二重奏』長城書局、1933年、1～2頁）

高陵『紅樓春深』は、「浩然訳版」の下線部とつきあわせると、「浩然訳版」を参照にした痕跡がみられる。

這時候，青年張鶴年剛在路上走過，他看見碧蓮在花店裏站着不動，便立刻走了進去。鶴年是某法政大學的畢業生，在四五年前，他寄寓在碧蓮附近的一家人家，碧蓮每天從家裏上學，必須經過鶴年的寓所，那時候鶴年早就私戀着碧蓮了。他們漸漸的認識起來，有時約着一同到野外散步，有時也到影戲院看電影，到茶店喝茶。碧蓮的美，把鶴年吸住了。（高陵『紅樓春深』、2～3頁）

張鶴年と周碧蓮の恋愛に関する描写は、「浩然訳版」と酷似している。

四五年前，正木省三是某法政大學的學生，寄寓在扶美子附近的一家人家，扶美子每天從家裏上學，必要經過省三的寓所，那時候，省三早就私戀着扶美子了。他們時常見面，時常談話，時常約同到影戲院裏看電影，到菜館裏喝茶。扶美子的美色，把省三吸住了，使他不時的想親近她。（浩然訳『結婚二重奏』、7頁）

他方、この描写は菊池寛の原作小説<sup>41)</sup>とは異なり、また「張品訳版」

---

41) 原作は、次のように描写している。

四、五年前に、省三は法科大学生として、扶美子の家のすぐ近所に下宿してゐた。扶美子は、殆ど気がつかないのであるが、省三は、毎日扶美子に会ふのを楽しみに下宿を出てゐた。そして、女子大学に通つてゐた扶美

42) とも異なる箇所がある。翻訳小説の出版と販売状況、また小説の具体的な描写内容から見ても、高陵『紅樓春深』が参考にしたのは「浩然訳版」であると断定できる。つまり、高陵『紅樓春深』は、映画作品のストーリーを基にし、「浩然訳版』を参考にして部分的な補完をしながら創作された映画小説である。

映画『紅樓春深』に登場した演劇『臥薪嘗胆』に関して、高陵の映画小説『紅樓春深』では、李社長は周碧蓮に郁青峰を紹介する場面でのみ登場している。「こちらは郁青峰先生です。彼の新しい舞台劇『臥薪嘗胆』は、うちの劇団で近々上演される予定で、彼はわざわざ無錫から舞台監督として来ました」との一節である。<sup>43)</sup>しかし、その物語やりハーサルの状況については直接の描写はない。映画では激しい抗日救国の感情が表現されているが、映画小説ではほとんど扱われず、ほぼ消されてしまった。

高陵『紅樓春深』は、後に中学生書局によって再版され、1941年以降も販売され続けた。このことから、高陵『紅樓春深』が一般の読者に広く受け入れられていたことが分かる。

映画『紅樓春深』が視聴できない現在では、『申報』の『電影小説紅樓春深』も、「電影小説叢刊」の高陵『紅樓春深』も映画『紅樓春深』

---

子と三日に一度は、停留場で一緒になった。彼は、扶美子に話しかける機会をねらってゐたが、端麗でとりすましてゐる扶美子に対して、そんな機会はなかった。彼は、自分で扶美子に接近するのが不可能だと分ると、いろいろ手を廻して扶美子の家庭に接近する事を考へた。(『菊池寛全集 第七巻』高松市菊池寛記念館、1994年、276頁)

42) 「張品訳版」は、次のように翻訳している。

四五年前、省三是法科大學生、就寄宿在扶美子家的附近。扶美子可算一點沒注意他。但是省三每天爲會扶美子，高興的走出了寄宿舍。而且，和女子大學通學的扶美子，三天一回在車站上遇到一塊。他盼望着能有和扶美子說上話的機會。但是，對於端麗莊重的扶美子，那樣的機會是沒有的。他知道自身接近扶美子是不可能的事了，使用種種的手段想法接近扶美子的家庭。(張品訳『結婚二重奏』濟南渤海叢書社、1933年12月、9頁)

43) 高陵『電影小説叢刊之一 紅樓春深』開華書局、1934年10月、9頁。

の作品研究のみならず、菊池寛『結婚二重奏』の受容研究においても貴重な資料である。

### 3. 映画『結婚交響曲』

十年の歳月を経て、1944年に『結婚二重奏』は「結婚交響曲」という名前で再び映画化され、中華電影聯合股份有限公司（以下「華影」と称す）によってスクリーンに登場した。映画『結婚交響曲』は、楊小仲が脚本・監督した、「華影」作品である。<sup>44)</sup>『紅樓春深』の時と比較すると、上海の社会政治環境は大きな変化を遂げ、すでに日本の占領地となり、過去の「抗日救亡」から「日華親善」へと変化しており、映画製作会社も民間の映画会社から、国民政府が統制する国策映画会社になった。映画『結婚交響曲』は、日本占領下の上海で製作された、唯一の日本文芸作品を原作とする映画である。

「華影」は、中華電影股份有限公司（1939年6月27日創立）、「中華聯合製片股份有限公司（1942年4月10日創立）及び上海影院股份有限公司（1943年1月1日創立）を合併・改組し、1943年5月12日に設立された、汪精衛を首班とする南京国民政府の指導ならびに監督を受け、対日協力を目的とする国策映画会社である。<sup>45)</sup>

「華影」の設立後、日中の映画交流と提携は一層強化され、映画上映から映画製作にまで拡大した。

中日両国が緊密に提携し、文化の交流が着実に進展している今日、中日両国の映画を相互に紹介し合う取り組みは、近年非常に光栄な成果を上げている。例えば、日本の映画が上海で絶えず上映されており、中国の映画も日本各地で巡回上映されている。これらは消えることのない印象となっている。

---

44) 『結婚交響曲』（資料影片版）は、現在youtubeでも視聴できるが、映画タイトルのクレジットが欠如、一部内容も前後が乱れている。

45) 辻久一『中華電影史話 一兵卒の日中映画回想記 1939～1945』凱風社、1998年、18～19頁。

中国での菊池寛『結婚二重奏』の受容について—小説の映画化を中心に—

今回、楊小仲が新たな道を切り開き、毅然と菊池氏の作品を選び、文学的な雰囲気満ちた映画に改編して、私たちに紹介するのは言うまでもなく、賞賛に値することである。我々は心から成功を期待している！（「楊小仲新作『結婚交響曲』——採取名著結婚二重奏改編電影」『華影周刊』第36期1944年3月8日、4頁）

『結婚交響曲』の製作は1944年3月初旬に着手した。<sup>46)</sup> それとほぼ同時期に、1944年2月下旬、「華影」と大日本映画製作株式会社（大映）との合作映画『狼火は上海に揚る 春江遺恨』（監督稲垣浩・岳楓・胡心霊、1944）の製作開始も公表した。<sup>47)</sup> そして、当時「大映」の社長は菊池寛である。<sup>48)</sup> 楊小仲が菊池寛の『結婚二重奏』を選び、映画化するのは、「華影」と「大映」の映画製作提携と全く無関係とはいえないであろう。

楊小仲（1899-1969）は、1921年に映画デビュー、生涯、映画を百作品以上監督しており、中国における最も多くの映画作品を監督した一人である。<sup>49)</sup> 彼は1926年、徳富蘆花の同名小説を映画化した『不如帰』（脚色陳趾青、国光影片有限公司）を監督しており、中国において最初に日本文芸作品を映画化した映画監督の一人である。楊小仲が初めて監督と脚本も兼ねながら日本文芸作品を映画化したのは、『結婚交響曲』であった。

映画『結婚交響曲』も登場人物の名前や地名は中国のものに置き換えられた。次頁の【表1】で示しているように、人物設定は女優の周曼華の年齢に合わせるためか、ヒロイン余梅枝の年齢は二一歳に設定さ

---

46) 『結婚交響曲』昨開拍『東方日報』1944年3月7日。

47) 「華影・大映・合作撮製『春江遺恨』」『華影週刊』第34期、1944年2月23日、1頁。

48) 菊池寛が「大映」社長の在任期間は、1943年3月から1946年12月までである。（『新潮日本文学アルバム 菊池寛』新潮社、1994年）

49) 石川・徐文明「楊小仲：一種中国早期职业电影导演的范式生存」『電影芸術』2009年第2期、83頁。



	結婚交響曲	結婚二重奏
余梅枝	21歳、広東の人、華南大学英文系卒業、吉雨村事務所の翻訳助手	山路扶美子 24歳、新潟の人、女子大学の英文科卒業、吉村事務所英語翻訳助手
方正雄	新進作家、演出家	立花芳雄 新進作家、演出家
欧陽明珠	新生劇団の女優	木村弥生 新生劇団の女優
穆省三	法科大学卒業、会社役員（襄理）、父が商会会長、梅枝の父親が務めている銀行の理事長	正木省三 法科大学卒業、会社員、父が県会議長
吉雨村	作家、新生劇団支配人	吉村 小説家
余姐	子供を連れて、北京の夫の元へ	扶美子の姉 名古屋に嫁いだ二児の母、夫の転任で大連へ
琳子	広東の人、方正雄の婚約者、四年前に死去	綾子 新潟の人、立花の婚約者、四年前に死去

【表1】主な登場人物設定対照表

れ、そして、反日感情を刺激しないためか、余のお姉さんの行き先は原作の「満洲国」の大連から北京に変更されている。【表2】のように、『結婚二重奏』を模倣して、上海、蘇州、杭州、南京の四都市での物語の展開になっている。蘇州のストーリーに関しては、野外のシーンは一切なく、すべてのシーンは「東華公寓」で撮影された。

結婚交響曲		結婚二重奏	
上海		東京	
蘇州	東華公寓	逗子	逗子ホテル、海辺、駅
杭州	香風旅館	伊豆	香風館
南京	下関旅館	京都	鴨川沿いの宿屋

【表2】主な登場都市・施設対照表

映画『結婚交響曲』は、一組のカップルが分かれ、それが結果的に二組の夫妻の誤った結びつきを引き起こすという悲喜劇を描いている。

吉雨村事務所の翻訳助手余梅枝は、吉雨村のオフィスで自作した戯曲『三友一女』の舞台公演のために上海にやってきた新鋭文学者方正雄と知り合った。正雄は四年前に亡くなった婚約者とよく似ている梅枝に対して好感を抱き、梅枝は正雄の亡くなった婚約者への深い愛で心を動かし、二人の親密さが増す。しかし、『三友一女』の主演女優欧陽明珠も正雄を好きになった。会社の若手役人穆省三も梅枝に恋焦がれており、彼女にプロポーズを断られても、あきらめず彼女を追いかけている。公演終了後、正雄は創作活動のため、蘇州に戻り、梅枝に

遊びに来よう誘う。梅枝は蘇州に来て、二人は愛情を深め、楽しい時間を過ごしたが、正雄が求めた愛のキスを拒んで、上海に帰る。同じ日に、梅枝と相前後して、欧陽も蘇州にやってきて、正雄のところを訪る。正雄は欧陽のことが好きでないが、彼女の誘惑に負けて男女の仲になり、一夜を過ごした。翌日、再び蘇州にやってきた梅枝がそれを知り、悲しみと憤りで胸がいっぱいになる。その後、正雄は付きまわっていた欧陽を避けるため、杭州の香風旅館に移り、執筆活動を続ける。欧陽は新聞記事に書かれた正雄の情報を頼って、香風旅館にやってきて、妊娠という口実で正雄に結婚を強要する。正雄は仕方なく、欧陽との結婚を決心する。梅枝は正雄と欧陽の結婚を知り、意地になって省三との結婚を決める。新婚旅行先の南京で、省三は許可なく梅枝にキスしたため、夫婦喧嘩になり、気まずい思いをして新婚生活が始まる。結婚後、正雄と欧陽は上海で新居を構えて暮らし始めたが、欧陽の妊娠報告は二人の結婚を迫るための真っ赤な嘘であることが発覚、夫婦関係が悪化する。欧陽は毎日夜遅くまでダンスホールに通い、愛人もできた。限りない後悔が日夜、正雄をさいなんでいる。結婚後仮面夫婦の生活を送っている省三は、やるせない梅枝の歓心を得ようと二人の春旅行を企画し、梅枝の提案で杭州に行き、香風旅館に宿泊することにした。香風旅館に宿泊した梅枝は給仕に案内してもらい、正雄の専用部屋を訪ね、正雄に出せなかった手紙をポケットに収めて、自分の梅の小枝の刺繍入りハンカチを書類入れに入れる。香風旅館に到着した正雄は、旅館を後にする梅枝と省三と玄関ですれ違い、部屋に入る。正雄は梅枝のハンカチを発見し、窓越しに大通りを眺める。

映画『結婚交響曲』は『結婚二重奏』と同じく、別れた余梅枝（山路扶美子）と方正雄（立花芳雄）は二度目の出会いはなかった。余梅枝がわざと自分のハンカチを方正雄の書類入れに残して、これを通じて思いを伝えるというプロットは、原作にはなく、『結婚の交響曲』で加えられたものである。余梅枝の名前と同じ意味の「梅の小枝の刺繍

入りハンカチ」に関するプロットの導入によって、余梅枝と方正雄の愛の行方を暗示する、余韻を残した結末になっている。シグナル的な物を用いて胸の内を伝えるという愛情表現は、中国人の昔からの常套手段で、メロドラマには飽きずに起用していた。



【図5】 独りで暴食する穆省三



【図6】 偽装自殺がわかった方正雄

映画『結婚交響曲』は、ローカライズされた改編において、主に原作のストーリーに影響を与えない範囲で、人物の性格表現やコメディの効果を向上させるために工夫が凝らされた。例えば、穆省三が余梅枝を食事に誘い、一人で一卓分の食事を手で全部食べ尽くす場面（【図5】）や、欧陽明珠が方正雄と口論し、滋養品「牛肉汁」を飲んで自殺を装うシーン（【図6】）などは、人物の性格を表現し、同時に笑いを誘う。それらは原作にはなく、『結婚交響曲』において喜劇効果を増すために加えられた「噓頭・笑いのツボ」である。「上海の人々は、このような悪趣味（肉麻）をユーモアと見なす「噓頭・笑いのツボ」を好むようである」。<sup>50)</sup>

楊小仲は、『結婚交響曲』に庶民に好まれるようなエピソードの加筆は行ったが、社会情勢を考慮した内容の改編は行わなかったため、当時の中国では受容しがたい内容はそのままになり、一部の観客から批判を受けることとなった。「作家方振雄氏は、蘇州で美しいマンションに住んでおり、杭州には高価な小さな別宅も借りている。西洋のスー

<sup>50)</sup> 王璋「從『結婚交響曲』想到」『社会日報』1944年4月22日。

中国での菊池寛『結婚二重奏』の受容について—小説の映画化を中心に—

ツに身を包み、生活は非常に裕福そうであり、このような『貴族的』な作家が文章を書いて生計を立てるのは、今の中国では『なかなか見られない』存在である。また、ホテルの主人は彼の名声を尊敬し、特に彼のために一部屋を常時空けておいて、彼が宿泊できるようにしている。こうした慣習は、今の社会ではなかなか例を見つけることが難しいものである。菊池寛は日本の作家であり、彼が書いたのはおそらく彼の国の人々や出来事に関するものであるが、脚本は中国の現実の状況を顧みず、『理想的に』そのまま持ち込んでいる。中国の国情に合

わず、脚本が責任を負うべきである」。<sup>51)</sup>

映画『結婚交響曲』は1944年4月15日、「大光明」、「滬光」、「新光」三館で同時公開された(【図7】)。映画上映の新聞予告では、「日本文学の巨匠(巨子)菊池寛の名作結婚二重奏の改編」と、その原作は菊池寛『結婚二重奏』であることを大きく宣伝している(【図8】)。

『結婚交響曲』は、当初上海の「大光明」、「滬光」二館の同時公開の予定であったが、1944年4月15日、「新光」を増やし、三館での同時公開上映になった。上映時間は1時間57分である。

映画『結婚交響曲』公開後、一部の観客は「中聯(ママ)公司が『結婚交響曲』を映画化することは、中日文化の交流を促進する上で非常に大きな



【図7】初日上映広告

(『申報』1944年4月15日)



【図8】上映予告

(『申報』1944年4月14日)

51) 王瑋「從『結婚交響曲』想到」『社会日報』1944年4月22日。

成果があると言え、これは私たちが喜び、感謝すべき素晴らしい出来事である」<sup>52)</sup> と、日中文化交流の観点から積極的な評価を行い、『結婚交響曲』は、非常に価値のある優れた文芸映画であり、恋愛に関しては明朗な啓示があり、すべての若い男女が見るべきだ」<sup>53)</sup> という支持の声もあった。1944年12月、華北作家協会推薦で華北各地で公開上映した際、華北作家協会が同協会会員や関係者を招待し、北京の洲洲会館で映画試写会を行い、「数百人の来場者から非常に高い評価を受けた」。<sup>54)</sup>

他方、批判的な立場を取る観客も多かった。『結婚交響曲』は日本の文豪、菊池寛の文学名作『結婚二重奏』を基にした映画である。通常、文学作品を映画化する際は、慎重に行われるべきである。しかし、『結婚交響曲』は単なる低俗な趣味で笑いを取るだけの映画に過ぎない。「対話が俗悪になり、言葉遣いが低俗になってしまった。一部の対話はあまりにも甘ったるくなっている。そのため、『結婚交響曲』から芸術的な雰囲気を見い出すのは非常に難しいだろう」。<sup>55)</sup> 『結婚交響曲』を見た後、それは笑劇なのか、恋愛劇なのか、悲劇なのか、それとも喜劇なのか、私は理解できない」。<sup>56)</sup> その批判は、主に下品なセリフと過剰なコメディの演技に集中していた。

映画『結婚交響曲』の受容においては、政府主導の主流メディアが賞賛する一方で、一般のメディアからは批判される現象が現れた。

#### 4. おわりに

菊池寛の長篇小説『結婚二重奏』は、彼の作品の中で最初に中国で

---

52) 陳綿「結婚交響曲推薦的話」『華北映画』第72期、1944年12月20日、10頁。

53) 金楓「充滿文藝氣息的『結婚交響曲』」『華影週刊』第44期、1944年5月3日、4頁。

54) 「華北作協推薦影片結婚交響曲」『中華週報』(北京)第1卷第13期、1944年12月17日、9頁。

55) 孟郁「結婚交響曲」『上海影壇』第1卷第8期、1944年5月10日、36頁。

56) 鮑忠祈「通俗平凡的結婚交響曲」『影劇界』革新号第1期、1944年5月26日、23頁。

中国での菊池寛『結婚二重奏』の受容について—小説の映画化を中心に—

映画化された作品ではないものの、唯一、二度にわたって映画化された菊池寛の文学作品である。映画『紅樓春深』として映画化された1934年は反日感情が高揚していた。映画『結婚交響曲』として映画化された1944年は日本占領下での改編であった。そのため、両作品ともに改編の動機や内容の表現には、多かれ少なかれ当時の政治的な影響が色濃く反映されており、特に、『紅樓春深』により強く影響がみられる。

物語の改編において、映画『紅樓春深』は大胆かつ広範囲に、主人公の愛と運命、更には物語の結末に手を加え、原作の恋愛悲劇から愛の大団円の喜劇に変えた。一方で、『結婚交響曲』の物語への改編は比較的慎重で、原作の基本的な物語の枠組みを保ちつつ、物語の詳細な表現やコメディ的な要素に焦点を当て、観客を笑わせる悲喜劇に仕上げた。

『結婚二重奏』は単なる映画化だけでなく、その映画化された『紅樓春深』が再度同名の中篇映画小説『紅樓春深』に改編され、小説から映画へ、そして再び小説へとメディア間での伝播が実現された。映画を媒介にして小説『紅樓春深』の内容は原作から大きく変化し、中国風にアレンジされた翻案小説となった。

『結婚二重奏』の越境、メディア間での伝播の過程では、浩然による翻訳版が大きな影響を及ぼしており、無視できない重要な位置を占めていた。

#### 【付記】

本研究にあたっては、科研費「貫戦期における日中映画の越境と協働をめぐる総合的研究」(20H01222)の助成をいただいた。

本稿は、2022年3月20日にオンラインで開催された「日本近現代文学研究におけるメロドラマ的想像力の展開に関する多角的研究」(19K00350)・「貫戦期における日中映画の越境と協働をめぐる総合的研究」(20H01222)合同研究会「(国民)を縫い直す——貫戦期におけるメロドラマ的想像力の歴史的位相」に

おける口頭発表（原題「中国での菊池寛『結婚二重奏』の映画化について——『紅樓春深』と『結婚交響曲』』）の一部をもとに加筆修正したものである。